

=====

第3章 電磁場の力線と調和振動子
§ 4 Fourier 変換
2003.05.21 by KENZOU

=====

§ 4 Fourier 変換

電磁場を空間変数について Fourier 変換してみる。こうすると、先の話しになるが、実は Fourier 変換の係数が解析力学でいう一般化座標として取り扱えることになり、従って Lagrangian や Hamiltonian の理論が電磁場にも応用できるようになる。これは電磁場を量子論的に取り扱う準備ともなるわけです。

さて Fourier 変換 [巾身は sin 関数、cos 関数の寄せ集め] をやるのに、一辺 L の大きな立方体の中に電磁場の全体系を入れ、周期的境界条件をつけると

$$\mathbf{E}(\mathbf{x}, t) = \frac{1}{\sqrt{\epsilon_0 V}} \sum_{\mathbf{k}} \mathbf{p}_{\mathbf{k}}(t) \exp(i\mathbf{k} \cdot \mathbf{x}) \quad (3.8)$$

$$\mathbf{B}(\mathbf{x}, t) = \frac{1}{\sqrt{\epsilon_0 V}} \sum_{\mathbf{k}} \mathbf{q}_{\mathbf{k}}(t) \exp(i\mathbf{k} \cdot \mathbf{x}) \quad (3.9)$$

となります。ここで Fourier 係数は複素数ベクトルです。また、和は周期的境界条件を満たすという条件から

$$\mathbf{k} \equiv \frac{2\pi}{L} \mathbf{n} \quad \mathbf{n} = 0, \pm 1, \pm 2 \dots \quad (3.10)$$

のすべての \mathbf{n} についての 3 重の和です。

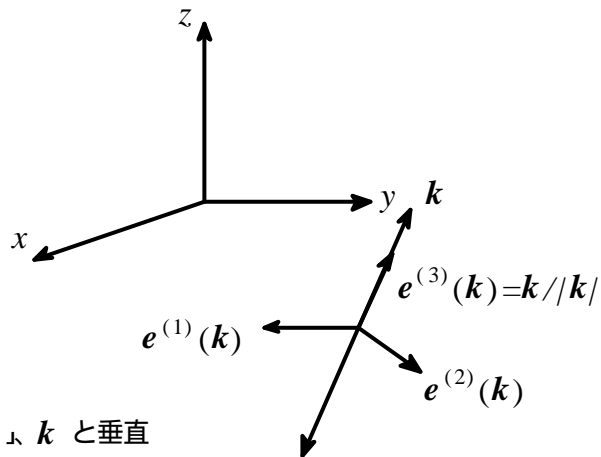
ここで後の便利を考えて Fourier 係数を 3 個の互いに直交する単位ベクトル $\mathbf{e}^{(1)}$, $\mathbf{e}^{(2)}$, $\mathbf{e}^{(3)}$ で展開すると

$$\mathbf{p}_{\mathbf{k}}(t) \equiv \sum_{r=1}^3 \mathbf{e}^{(r)}(\mathbf{k}) p_{\mathbf{k}}^{(r)}(t) \quad (3.11)$$

$$\mathbf{q}_{\mathbf{k}}(t) \equiv -i \sum_{r=1,2} \mathbf{k} \times \mathbf{e}^{(r)}(\mathbf{k}) q_{\mathbf{k}}^{(r)}(t) \quad (3.12)$$

と書ける。ここで $\mathbf{e}^{(3)}$ は

$$\mathbf{e}^{(3)} = \frac{\mathbf{k}}{|\mathbf{k}|} \quad \text{とする。}$$



Fourier 成分の \mathbf{k} の方向を向いたのを「縦成分」、 \mathbf{k} と垂直なのを「横成分」と呼ぶ。磁場は横成分しかないので、(3.12)

は (3.11) と違って \mathbf{k} と $\mathbf{e}^{(r)}$ ($r=1,2$) の外積で表わすことができますね。また、虚数 i は外に無理やり引っ張り出したと考えておけばいいでしょう。この $\mathbf{e}^{(1)}$, $\mathbf{e}^{(2)}$ は偏極ベクトルと呼ばれる。

3 個の単位ベクトルの間には規格化直交条件

$$\mathbf{e}^{(r)}(\mathbf{k}) \cdot \mathbf{e}^{(s)}(\mathbf{k}) = \delta_{rs} \quad (3.13a)$$

と完全性条件

$$\sum_{r=1}^3 \mathbf{e}_i^{(r)}(\mathbf{k}) \mathbf{e}_j^{(r)}(\mathbf{k}) = \sum_{r=1,2} \mathbf{e}_i^{(r)}(\mathbf{k}) \mathbf{e}_j^{(r)}(\mathbf{k}) + \mathbf{e}_i^{(3)}(\mathbf{k}) \mathbf{e}_j^{(3)}(\mathbf{k})$$

$$= \sum_{r=1,2} e_i^{(r)}(\mathbf{k}) e_j^{(r)}(\mathbf{k}) + \frac{1}{k^2} k_i k_j = \mathbf{d}_{ij} \quad (3.13b)$$

が各 \mathbf{k} について成り立つ。ここで $e_i^{(r)}$ と単位ベクトル $e^{(r)}$ が細文字となり、しかも足に i, j などが付いていることにギョッとされた向きがおられるのではないのでしょうか。じつはこの足は慣性系座標 (x y z) の成分を意味する足なので、ここで完全性条件なるものを簡単に復習しておくことにしましょう。

【復習】

関数 $f(x)$ が $\int_a^b f(x) dx = 1$ のように展開される時、 $\{f_i(x)\}$ を完全性の条件 ($\{f_i(x)\}$ の要素のほかには直交する関数が1つもないとき $\{f_i(x)\}$ は完全であるといわれ、この場合 $\{f_i(x)\}$ は完全正規直交関数系であるという) と呼ぶ。

$$f(x) = \sum_i C_i f_i(x), \quad \int_a^b f^2(x) dx = 1 \quad (\text{規格化直交関数系})$$

$$C_i = \int_a^b f_i^*(x) f(x) dx$$

$$\int_a^b f_i^*(x) f_j(x) dx = \mathbf{d}_{ij} \quad (\text{直交条件 } e_i \cdot e_i^* = \mathbf{d}_{ij})$$

$$f(x) = \int_a^b \sum_i f_i(x) f_i^*(x') f(x') dx'$$

$$\sum_i f_i(x) f_i^*(x') = \mathbf{d}(x-x') \quad (\sum_i e_i \cdot e_i^* = 1)$$

$$\int_a^b \mathbf{d}(x-x') f(x') dx' = f(x)$$

今、簡単な例として (手抜きだが、...)

$$f(x) = C_1 f_1 + C_2 f_2 \quad \text{とすると}$$

$$\begin{aligned} \int_a^b f^2(x) dx &= \int_a^b (C_1^2 f_1^2 + C_2^2 f_2^2 + C_1 C_2 f_1 f_2 + C_2 C_1 f_2 f_1) dx \\ &= C_1^2 + C_2^2 = 1 \quad \cdots \text{完全性 の焼き直し} \end{aligned}$$

そこで (3.11) 式に立ち戻ると

$$\mathbf{p}_k(t) \equiv \sum_{r=1}^3 e^{(r)}(\mathbf{k}) p_k^{(r)}(t) = e^{(1)}(\mathbf{k}) p_k^{(1)}(t) + e^{(2)}(\mathbf{k}) p_k^{(2)}(t) + e^{(3)}(\mathbf{k}) p_k^{(3)}(t) \quad (3.11)$$

右辺の各項の係数 $e^{(r)}(\mathbf{k})$ はベクトルであるから、これをそれぞれ 3 成分 (x, y, z) に分解すると

$$\mathbf{p}_k(t) = \begin{pmatrix} e_1^{(1)}(\mathbf{k}) \\ e_2^{(1)}(\mathbf{k}) \\ e_3^{(1)}(\mathbf{k}) \end{pmatrix} p_k^{(1)} + \begin{pmatrix} e_1^{(2)}(\mathbf{k}) \\ e_2^{(2)}(\mathbf{k}) \\ e_3^{(2)}(\mathbf{k}) \end{pmatrix} p_k^{(2)} + \begin{pmatrix} e_1^{(3)}(\mathbf{k}) \\ e_2^{(3)}(\mathbf{k}) \\ e_3^{(3)}(\mathbf{k}) \end{pmatrix} p_k^{(3)}$$

と書けます。従って、より完全性条件として

$$\begin{pmatrix} e_1^{(1)}(\mathbf{k}) \\ e_2^{(1)}(\mathbf{k}) \\ e_3^{(1)}(\mathbf{k}) \end{pmatrix} \begin{pmatrix} e_1^{(1)}(\mathbf{k}) \\ e_2^{(1)}(\mathbf{k}) \\ e_3^{(1)}(\mathbf{k}) \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} e_1^{(2)}(\mathbf{k}) \\ e_2^{(2)}(\mathbf{k}) \\ e_3^{(2)}(\mathbf{k}) \end{pmatrix} \begin{pmatrix} e_1^{(2)}(\mathbf{k}) \\ e_2^{(2)}(\mathbf{k}) \\ e_3^{(2)}(\mathbf{k}) \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} e_1^{(3)}(\mathbf{k}) \\ e_2^{(3)}(\mathbf{k}) \\ e_3^{(3)}(\mathbf{k}) \end{pmatrix} \begin{pmatrix} e_1^{(3)}(\mathbf{k}) \\ e_2^{(3)}(\mathbf{k}) \\ e_3^{(3)}(\mathbf{k}) \end{pmatrix} = 1$$

となって、これをまとめると (3.13b) がでてくることになります。

余録】

Fourie変換で $\tilde{N} \otimes ik$ となることを見ても。 $G(x, t)$ の3次元 Fourie変換を次のように定義します。

$$\widehat{G}(k, t) = \int_{-\infty}^{+\infty} G(x, t) \exp(-ik \cdot x) dx$$

さて、 $\tilde{N}G(x, t)$ をFourie変換すると

$$\int_{-\infty}^{+\infty} \tilde{N}G(x, t) \exp(-ik \cdot x) dx$$

となります。 $k \cdot x$ は内積の定義より $k \cdot x = k_1 x_1 + k_2 x_2 + k_3 x_3$ となるから、その x 成分は

$$\int \frac{\partial G}{\partial x} \exp(-ik \cdot x) dx = \int_{-\infty}^{+\infty} \int_{-\infty}^{+\infty} \int_{-\infty}^{+\infty} \frac{\partial G}{\partial x} \exp\{-i(k_1 x_1 + k_2 x_2 + k_3 x_3)\} dx$$

と書ける。まず x_1 について部分積分を行なうと、式は

$$= \int_{-\infty}^{+\infty} \int_{-\infty}^{+\infty} \left([G \exp(-ik \cdot x)]_{-\infty}^{+\infty} - \int_{-\infty}^{+\infty} (-ik_1) G \exp(ik \cdot x) dx_1 \right) dx_2 dx_3$$

ここで の右辺第1項は0となる ($\because e^{\pm ik_1 x_1} = 0 : x_1 = \pm \infty$)。従って

$$= ik_1 \int_{-\infty}^{+\infty} G \exp(ik \cdot x) dx_1$$

x_2, x_3 成分についても同様な計算を行なうと 式は

$$\int_{-\infty}^{+\infty} \nabla G(x, t) \exp(-ik \cdot x) dx = ik \int_{-\infty}^{+\infty} G(x, t) \exp(-ik \cdot x) dx = ik \widehat{G}(k, t)$$

つまりFourie変換で

$$G(x, t) \rightarrow \widehat{G}(k, t), \tilde{N}G(x, t) \rightarrow ik \widehat{G}(k, t)$$

となるから、 \tilde{N} のFourie変換は $\tilde{N} \rightarrow ik$ と書けるという次第。

余録ついでにFourie変換の性質をリストアップしておく。これは<http://boat.zero.ad.jp/~zbe89326/math.htm>からのパクリ (^_^)。

$$F(k) = \frac{1}{\sqrt{2p}} \int_{-\infty}^{+\infty} f(x) \exp(-ikx) dx \quad \cdots f(x) \text{ から } F(k) \text{ へのFourie変換}$$

$$f(x) = \frac{1}{\sqrt{2p}} \int_{-\infty}^{+\infty} F(k) \exp(ikx) dk \quad \cdots F(k) \text{ から } f(x) \text{ へのFourie逆変換}$$

$f(x)$ のFourie変換が $F(k)$ であることを $f(x) \leftrightarrow F(k)$ で表すと

$$f(x) \text{ の微分の変換} \quad \frac{d^n}{dx^n} f(x) \leftrightarrow (ik)^n F(k)$$

$$f(x) \text{ の積分の変換} \quad \int_{-\infty}^{+\infty} f(x) dx \leftrightarrow \frac{1}{ik} F(k)$$

$$\text{相似性} \quad f(ax) \leftrightarrow \frac{1}{|a|} F\left(\frac{k}{a}\right)$$

$$k \text{ の移動} \quad \exp(iax) f(x) \leftrightarrow F(k-a)$$

$$x \text{ の移動} \quad f(x-a) \leftrightarrow \exp(-iak) F(k)$$

$$F(k) \text{ の微分の逆変換} \quad (-ix)^n f(x) \leftrightarrow \frac{d}{dk^n} F(k)$$

$$\text{畳み込みの定理} \quad \frac{1}{\sqrt{2p}} \int_{-\infty}^{+\infty} f(\mathbf{i}) g(x-\mathbf{i}) d\mathbf{i} \leftrightarrow F(k) G(k)$$

ついでのついでに

$$d(x-x_0) = \frac{1}{\sqrt{V}} \int_{-\infty}^{+\infty} \exp(ik \cdot (x-x_0)) dk$$

$$\frac{\partial}{\partial x_i} d(\mathbf{x}-\mathbf{x}') = \partial_i d(\mathbf{x}-\mathbf{x}') = ik_i d(\mathbf{x}-\mathbf{x}')$$

長い余剰になってしまった。これで余剰終わり。

以上の余剰は次ぎの関係を引き出す時に活用できる。

$$\begin{aligned} \frac{1}{V} \sum_{\mathbf{k}} \sum_{r=1,2} e_i^{(r)}(\mathbf{k}) e_j^{(r)}(\mathbf{k}) \exp i\mathbf{k} \cdot (\mathbf{x}-\mathbf{x}') &= \frac{1}{V} \sum_{\mathbf{k}} \left\{ d_{ij} - \frac{k_i k_j}{k^2} \right\} \exp i\mathbf{k} \cdot (\mathbf{x}-\mathbf{x}') \\ &= \left\{ d_{ij} - \frac{\partial_i \partial_j}{\tilde{N}^2} \right\} d(\mathbf{x}-\mathbf{x}') \end{aligned} \quad (3.13c)$$

(3.11)、(3.12)をそれぞれ(3.8)、(3.9)に代入すると、まず電場の方は

$$\mathbf{E}(\mathbf{x}, t) = \frac{1}{\sqrt{\epsilon_0 V}} \sum_{\mathbf{k}} \sum_{r=1}^3 \mathbf{e}^{(r)}(\mathbf{k}) p_k^{(r)}(t) \exp(i\mathbf{k} \cdot \mathbf{x}) \quad (3.14)$$

これを縦、横成分にバラシテ書くと

$$E_L(\mathbf{x}, t) = \frac{1}{\sqrt{\epsilon_0 V}} \sum_{\mathbf{k}} e^{(3)}(\mathbf{k}) p_k^{(3)}(t) \exp(i\mathbf{k} \cdot \mathbf{x}) \quad (3.15a)$$

$$E_T(\mathbf{x}, t) = \frac{1}{\sqrt{\epsilon_0 V}} \sum_{\mathbf{k}} \sum_{r=1,2} \mathbf{e}^{(r)}(\mathbf{k}) p_k^{(r)}(t) \exp(i\mathbf{k} \cdot \mathbf{x}) \quad (3.15b)$$

となり、磁場の方は

$$\mathbf{B}(\mathbf{x}, t) = -\frac{i}{\sqrt{\epsilon_0 V}} \sum_{\mathbf{k}} \sum_{r=1,2} \mathbf{k} \times \mathbf{e}^{(r)}(\mathbf{k}) q_k^{(r)}(t) \exp(i\mathbf{k} \cdot \mathbf{x}) \quad (3.16)$$

となります。ところで電場や磁場は実数(物理量)であるから $-\mathbf{k}$ の成分に対しても同じように成り立たねばならない(行きと戻りの対称性とでもいましょうか)。ここでそれぞれの場合のFourier係数の関係を調べる分けですが、話しを分かりやすくするためFourier係数を C_k (複素数)とおいて $\mathbf{E} = \sum C_k \exp(i\mathbf{k} \cdot \mathbf{x})$ と書くことにします。するとその共役複素数をとると

$$\mathbf{E}^* = \sum C_k^* \exp(-i\mathbf{k} \cdot \mathbf{x})$$

となります。電場は実数ですから $\mathbf{E} = \mathbf{E}^*$ 。これから $C_k^* = C_{-k}$ という関係がでてきます。

さて、係数を元に戻すして、係数間の関係式を求めると、(3.15a)の電場の縦成分の場合は複素係数ベクトルの向きが逆方向となるので

$$p_k^{(3)*} = -p_{-k}^{(3)} \quad (3.17b)$$

(3.15b)の横型成分の場合は

$$p_k^{(r)*} = p_{-k}^{(r)} \quad (r=1,2) \quad (3.17a)$$

磁場の場合も同様にして

$$q_k^{(r)*} = q_{-k}^{(r)} \quad (r=1,2) \quad (3.18)$$

となります。

この章の冒頭で Fourier 係数は一般座標として扱い得るということを言いましたが、ディメンジョンを調べてみると、詳しいことをテキストを参照していただくとして

$$\left[p_k^{(r)} \right] = M^{\frac{1}{2}} L T^{-1} \quad (3.22)$$

となつて、これはエネルギーの平方根に次元となっています。また

$$\left[q_k^{(r)} \right] = M^{\frac{1}{2}} L \quad (3.23)$$

となり、いずれにしても双方とも力学的なディメンジョンを持っていることになります。通常の力学で運動量 × 位置のディメンジョンは角運動量ですね。(3.22)と(3.23)の積は

$$\left[p_k^{(r)} q_k^{(r)} \right] = M L^2 T^{-1} \quad (3.22)$$

となり、まさに角運動量のディメンジョンとなっています！

エピローグ

以上で第4章の§4をおわります。Fourier変換の導入により縦型・横型の意味が鮮明になりました。しかしまあ、規格直交関数系といい、完全性の条件といい、はっきりいってずっと昔に勉強した、今ではぼんやりと記憶のなかに潜んでいたものを引きずりだしながらの勉強でした(^); ; 結構しんどかった。

----- おつかれさま ~ *Coffee Break* $\nabla f x y d z c r$